

勤務医部会だより

“人は何か見えない力によって導かれ、
生かされている”



幹事 吉田幸彦

（日本赤十字社愛知医療センター

名古屋第二病院副院長）

私は医師としての専門は循環器内科ですが、最終的に心房細動の治療がライフワークの一つになりました。その経緯についてはいつも何かしら不思議な縁を感じています。今回はそれについて紹介させていただきます。

私の父は若くして脳梗塞を起こして半身不全麻痺となりました。父は私が浪人している時に2度目の脳梗塞を起こし、嚥下障害と失語を伴い、起立には介助が必要になりました。母の献身的な介護のおかげで、歩行器で歩くことができるようになりましたが、嚥下困難のため食事には毎回1時間程度の介助が必要でした。排泄も自分の意志ではできず、時間を決めてベッドサイドのポータブルトイレに長時間座っていました。当時は現在の様に介護施設・サービスも十分ではありませんでしたので、大学に通いながら私もできる範囲で介護を手伝いました。この時の経験はその後の私の人格形成に非常に強い影響を与えたと思います。非常に気が長くなりましたし、多少の困難に挫けない様になれたのもこの時の経験のおかげだと思います。偉人の遺訓は人によって受け取り方が異なると思いますが、30代の頃心に響いた言葉を紹介いたします。徳川家康は“人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし。急ぐべからず。不自由を常と思えば不足なし。心に望みおこらば困窮したる時を思い出すべし。堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思え。勝つことばかり知りて、負くること知らざれば害その身にいたる。おのれを責めて人をせむるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり。”と語っています。これを知って力づけられたことを明確に記憶していますし、その後も私の人生の大切な支えになりました。

私は卒業後、脳神経内科を志して現在の日赤名古屋

屋第二病院（八事日赤）に就職しました。父が脳梗塞になった事が強く影響していたのでしょうか。私が研修医をしていた頃の八事日赤には、非常に魅力的な先生方が循環器内科に多数いらしたことをよく覚えています。1年上には因田恭也先生、赤星誠先生、寺澤正恭先生がみえました。循環器内科を専門にしたのはその影響が強かったと思います。当時日本でもカテーテルアブレーション治療が始まっていましたが、上司の伊藤昭男先生と坪井直哉先生が中部地方で第一例目を実施され、私も介助者として参加しました。虚血性心疾患の分野では平山治雄先生が異動され、カテーテル技術の基礎を教えてくださいました。心不全・心筋症については平光伸也先生、森本紳一郎先生に師事いたしました。医師として最も楽しかった時期で、本当に充実した循環器初期研修を受けることができたと思います。その後愛知県立尾張病院に転勤してからも、虚血性心疾患と不整脈のどちらを専門にするか決めかねていましたが、村上善正先生、山田功先生、外山淳治先生の影響もあり不整脈、中でもカテーテルアブレーションを専門にするようになりました。1998年に心房細動のアブレーションが発表され、論文を読みながら自分なりのアレンジを加えて始めた治療が今では日本全国で年間8万人を超える人が受け、実際に脳梗塞の予防効果も期待されるようになってきました。前述のように私の父は若くして後遺障害の強い脳梗塞を繰り返しました。当時はアテローム性脳梗塞と信じていましたが、2度とも飲酒後の発症ですので、心房細動が原因だったのかもしれませんが、自分が意図すること無く循環器を選び、その結果として脳梗塞予防がライフワークの一つとなった事には、いつも何かしら運命的なものを感じています。

最近では究極の脳梗塞予防と言える左心耳閉鎖を、他院に先駆けて実施する機会にも恵まれました。今のところ不整脈専門医でこの治療に前向きな先生は少ないようですが、アブレーションを繰り返しても、全例で抗凝固薬を中止できるわけではありません。むしろ最初から左心耳閉鎖をお勧めの方が良い症例さえあります。最先端治療を自分で実施できる期間も短くなってきましたが、左心耳閉鎖の適切な普及にも尽力し、両親そして私を信じてこれまでに治療をさせて頂いた多数の患者様の御恩に報いたいと思います。